

大阪市住吉区

長居東2丁目所在遺跡発掘調査報告

大阪府住宅供給公社による

住宅建設工事に伴う発掘調査報告書

2005.6

財団法人 大阪市文化財協会



調査地全景(西から)

大阪市住吉区

長居東2丁目所在遺跡発掘調査報告

大阪府住宅供給公社による
住宅建設工事に伴う発掘調査報告書

2005.6

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

住吉区长居東2丁目所在遺跡の発掘調査は、昭和31年に建設された大阪府住宅供給公社東長居団地の建替え工事に伴って行われました。今回の調査地は、摂津国住吉郡大羅郷堀村字^{おおよしみこう あぶ}藤ヶ^{ふじけ}ー^{すみよしのつ}帯にあたります。調査地のある堀村は、古代から「住吉津」と河内、和泉、大和の三国を繋ぐ幹線道に隣接しており、村内には旧石器時代から江戸時代にいたる複合遺跡である南住吉遺跡の一部と新堀城跡伝承地（堀村集落）があります。また、堀村集落の北境は古代以降に整備された幹線道のひとつである「磯齒津路」^{しほのあも}（旧八尾街道、現長居公園通り）にあたります。

今回の調査では、近世から近代の粘土採掘場が多数見つかりました。これらは、^{あぶ}字を単位として広い範囲を計画的に掘削していたことが窺われ、近世以降の土地利用を解明する上で貴重な資料となりました。長居一帯で採掘された粘土は、昭和時代まで瓦や煉瓦、土管などの原料として住吉大社周辺で操業していた窯業所へ販売されていたことが地元において口承されており、今回の発掘調査によってそのことを裏付けることができました。

最後に、発掘調査と報告書作成にご協力を賜りました、大阪府住宅供給公社ならびに周辺住民の方々を始めとする関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

2005年6月

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会が大阪府住宅供給公社の委託を受け、2004年4月から5月にかけて住吉区長居東2丁目で実施した大阪府住宅供給公社による住宅建設工事に伴う発掘調査(NE03-1次、NEは長居東2丁目所在遺跡を示す)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪府住宅供給公社の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査研究部調査課長田中清美、長原調査事務所長植山洋の指揮のもと、同課平井和が担当した。調査の面積・期間などは第Ⅱ章第1節に記した。
- 一、本書の作成は調査課田中清美の指揮のもと、2005年3月7日から2005年6月30日にかけて行った。本文の執筆は調査課平井和が担当した。英文要旨の作成は平井が行い、当協会調査課学芸員宮本康治がこれを助けた。編集は平井が担当した。
- 一、第Ⅱ章第4節の足跡化石の観察については大阪市立自然史博物館地史研究室研究主幹榎野博幸氏、当協会研究資料課資料係長趙哲済が指導協力した。
- 一、大阪府美原町アサヒ衛陶株式会社(旧丹司製陶株式会社)2代目社長丹司得藏氏ならびに、3代目社長丹司善男氏からは、社史の御提供ならびに土管の製造技術などについて貴重な御教示を賜った。
- 一、住吉区在住の安本雅一氏、松本清氏、前田清右氏より地元の歴史について御教示を賜った。また、大阪府住宅供給公社市川創一郎氏には照会の労をお取りいただいた。
- 一、大阪市立長居小学校郷土室において、元大阪市立淡路小学校校長榮本幸男氏作成の住吉区史に関する教材を閲覧および借用するにあたり、同校教頭竹林康司氏に御配慮頂いた。
- 一、遺構写真は平井が撮影し、遺物写真の撮影は植草堂内田真紀子氏に委託した。
- 一、基準点測量および空中写真測量は株式会社かんこうに委託した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、その他の資料はすべて当協会が保管している。
- 一、発掘調査現場において、大阪市立自然史博物館館長郡須孝博氏(2004年11月25日御逝去)から貴重な御教示を賜りました。記して深く感謝の意を表するとともに、御冥福を御祈ります。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表したい。

凡 例

1. 本書で用いた層位学・堆積学的用語については、[趙哲済1995b]および、[小倉徹也2002]に準じる。また、本書で用いる基本層序の地層名は調査現場における層序を用い、南住吉遺跡との層序対比には調査略号である「MN」を付して「MN○層」とした。
2. 遺構名の表記は、土壇はSK、井戸はSE、その他の遺構はSXを冠している。
3. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中では「TP±○m」と記した。また、挿図中の方位は座標北を使用し、座標値は世界測地系2000に基づいた。
4. 地層の土色は[小山正忠・竹原秀雄1996]に準拠している。
5. 註は各節末に、引用・参考文献と索引は巻末に掲載した。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 遺跡の立地と既往の調査	1
第1節 遺跡の立地と地形概要	1
第2節 既往の調査	5
第Ⅱ章 NE03-1次調査	7
第1節 調査の経緯と経過	7
第2節 層序	9
第3節 遺構と遺物	13
1) 第2層上面検出の遺構と遺物	13
2) その他の遺物	20
第4節 足跡化石の観察	22
第Ⅲ章 調査成果の検討	23
第1節 長居東2丁目所在遺跡と堀村・前堀村の歴史	23
第2節 粘土採掘坑からみる大阪の窯業史	27
1) 長居東2丁目所在遺跡と周辺遺跡の粘土採掘坑について	27
2) 丹司家に残された大阪の窯業史	28
3) 丹司家に伝えられる大正期の土管製造	29
4) 近畿地方における近世から近代の土管の特徴について	30
5) 住友銅吹所跡出土土管と長居東2丁目所在遺跡出土土管について	31
第3節 まとめ	34
引用・参考文献	35

あとがき・索引

英文目次・要旨

報告書抄録

図 版 目 次

1	NE03-1次調査地遠景と主な遺構	3	NE03-1次調査地の遺構(二)
	上:調査地遠景(西から)		上:深掘トレンチ(北東から)
	中:杭列検出状況(西から)		中:第3a層堆積状況(北から)
	下:SE01・02完掘状況(西から)		下:足跡化石(北から)
2	NE03-1次調査地の遺構(一)	4	NE03-1次調査地の出土遺物(一)
	上:SK01~04(南から)	5	NE03-1次調査地の出土遺物(二)
	中:SK13(西から)		
	下:SK21(西から)		

挿 図 目 次

図1	長居東2丁目所在遺跡の位置	1	図14	出土遺物(3)	20
図2	大阪平野とその周辺の地形分類	2	図15	遺構の変遷	21
図3	周辺の遺跡	3	図16	足跡化石地層断面図	22
図4	過去の調査地の位置	5	図17	明治時代の福村周辺図	24
図5	調査区配置図	7	図18	長居東2丁目周辺における字区分復元図	25
図6	調査地断面図	11	図19	粘土探掘範囲の変遷	27
図7	遺構平面図	14	図20	土練りの方法	28
図8	遺構断面図(1)	15	図21	粘土の堆積状況の模式図	29
図9	遺構断面図(2)	16	図22	意匠	29
図10	出土遺物(1)	17	図23	土管の種類	30
図11	出土遺物(2)	18	図24	住友鋼吹所跡出土土管	32
図12	遺構断面図(3)	19	図25	長居東2丁目所在遺跡出土土管	33
図13	井戸断面図	20			

表 目 次

表1	南住吉遺跡の既往の調査	6	表3	南住吉遺跡の基本層序	10
表2	調査地の層序	9			

写 真 目 次

写真1	作業風景	8	写真3	深掘トレンチ作業風景	8
写真2	現地説明会風景	8			

第Ⅰ章 遺跡の立地と既往の調査

第1節 遺跡の立地と地形概要

長居東2丁目所在遺跡は、旧石器時代から江戸時代にいたる複合遺跡である南住吉遺跡と、室町時代に築城されたとされる新堀城跡伝承地の間に位置する。南住吉遺跡では、飛鳥時代的大型掘立柱建物群や溝などが調査されており、住吉地区の歴史を考える上で重要な成果をあげている。調査地の北には、古代以降住吉津と大和を結ぶ東西道である「磯渚津路」(現長居公園通り)が、東には難波宮を起点とする「難波大道」があったと推測されている(図3)。これらのことから、当該地域は交通の要衝であり、古代以降開発も進行していたことが窺われる。地質学的には上町台地の一部を形成する低位段丘上に位置し、地山上面の標高がTP+8.2mであることから、台地頂部周辺から比較すると東側に傾斜した地域にあたると考えられる。

本調査に先立つ試掘調査によって中世の可能性が高い遺構と遺物が確認されたことから、長居東2丁目所在遺跡として本調査が行われることになった。調査は重機によって現代の整地層や攪乱層を除去し、その後人力作業によって遺構の検出や層序の確認に努めた。しかしながら、調査予定面積のうち約180㎡については、昭和31(1956)年に建設された大阪府住宅供給公社東長居団地の基礎工事によって壊されていたため、残る範囲を対象に調査を進めた。また、調査地内に12㎡の深掘トレンチを設定して地層の観察を行った。

長居東2丁目所在遺跡は、上町台地の南部に位置しており、標高は約8.2mである(図1、2)。河内低地と大阪海岸低地を東西に分断する上町台地は、南北10km東西2～3kmの半島状の洪積台地で、南の泉北丘陵とつながっている。標高は、大阪城付近が最も高くTP+25mである。上町台地を縦断して見ると、大阪城から天王寺あたりはTP+25～15mで、天王寺から大和川あたりはTP+15～10mと低くなるが、大和川から泉北丘陵あたりにかけては次第に標高が高くなっていく。上町台地を横断して見ると、台地から東側への傾斜はおおむね緩やかで、次第に河内低地の下へ埋没している。一方、台地の西側は対称的に急な傾斜や崖が多く、大阪海岸低地や埋立地の下へ埋没して大阪湾へ達している。このような台地西側での急激な地形の変化は、縄文時代前期をピークとす

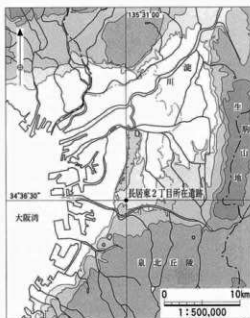


図1 長居東2丁目所在遺跡の位置

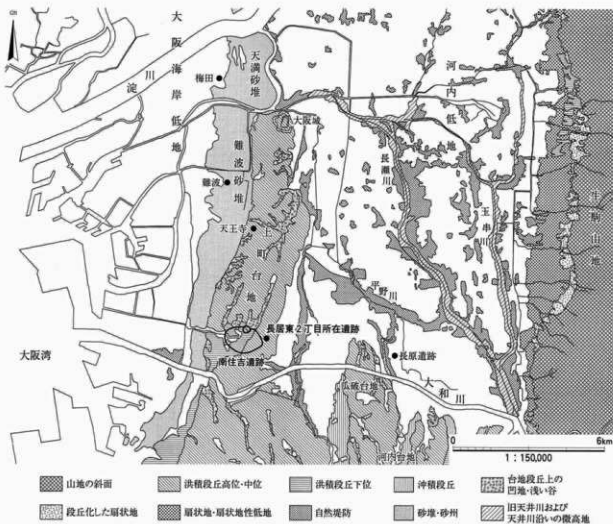


図2 大阪平野とその周辺の地形分類 (土地条件図[建設省国土地理院1983]に一部加筆)

る縄文海進(約6,000年前)による海食崖によって、台地の斜面が削られた結果と考えられている。弥生時代以降には淀川河口や上町台地の西縁に土砂が堆積し、天満砂堆や難波砂堆が形成され、江戸時代以降は新田開発や工業地開発のために海域への埋め立てが進行し現在にいたっている。

以上のように、地形的に見ると上町台地の西側は急傾斜で、東側は緩やかな傾斜を呈しているが、台地上は大小の谷が入組んで刻まれている。現在も清水谷や細工谷など「谷」の付く地名が数多くあるように、谷周辺部を中心として起伏に富んだ地形となっている。このような、地形的景観を背景として長居東2丁目所在遺跡の周辺には、多くの遺跡が点在している。

以下に、住吉区内の主な遺跡の概要について各時代ごとに概観する。住吉区内の主な遺跡を図3で見ると、山之内遺跡[大阪市文化財協会1998c、1999]、南住吉遺跡[大阪市文化財協会1998b、2002b、2004b]、遠里小野遺跡[大阪市文化財協会1999]、荘厳浄土寺境内遺跡[大阪市文化財協会2004a]、羽田4丁目所在遺跡[大阪市文化財協会2004c]が挙げられる。

長居東2丁目所在遺跡は初出の遺跡であるが、隣接する南住吉遺跡と地理的、歴史的に関連することが多いので、今後の検討作業が進めば南住吉遺跡の範囲を東に拡張し、長居東1～2丁目周辺も南住吉遺跡として意義付けることも可能であろう。南住吉遺跡は、大阪市住吉区南住吉を中心に大領・

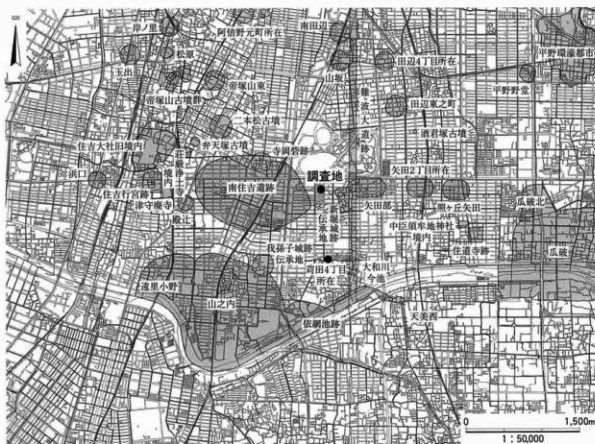


図3 周辺の遺跡（〔大阪市文化財協会2002a〕を改変した）

長居・長居西・長居東・菊田・我孫子東・我孫子・我孫子西・東住吉区长居公園に広がる南北約1km、東西約1.5kmの範囲を占めている。旧石器時代から江戸時代の複合遺跡で、北部に戦国時代末期の城館跡と推定される寺岡砦跡がある（図3・4）。

中期旧石器時代では、山之内遺跡や南住吉遺跡でナウマンゾウの足跡化石が検出されているが、人類の痕跡はまだ発見されていない〔大阪市文化財協会1998c、2002b〕。

後期旧石器時代では、住吉大社旧境内遺跡でナイフ形石器を製作したと考えられるサヌカイト製の横長剥片用石核が採集されている〔石神怡1983〕。山之内遺跡では、サヌカイト製の剥片が平安神宮火山灰層（始良一Tn火山灰：AT）の下位から発見されている。また、後世の遺構からではあるがナイフ形石器が出土している〔大阪市文化財協会1998c〕。南住吉遺跡では、遊離資料ではあるがサヌカイト製のナイフ形石器が完形で出土している〔大阪市文化財協会2004b〕。今後の調査によって石器製作跡が発見される可能性がある。

縄文時代では、南住吉遺跡で遊離資料ながら桶状剥離痕をとどめる有茎尖頭器や石鐮が採集されている。また、破片ながら口縁部の内面に縁帯文のある後期の土器も出土している〔大阪市文化財協会2004b〕。山之内遺跡では、前期にさかのぼる爪形文を施した土器や、晩期の滋賀里Ⅲa式土器・突帯文土器・石鐮が見つかった〔大阪市文化財協会1998c〕。

弥生時代では、南住吉遺跡で前期の遺物が認められ、中期には数地点で集落に関連する遺構が確認されている。山之内遺跡では、前期から遺構・遺物が確認され、中期には飛躍的に遺跡数が増加して

遺跡南部を中心に、住居や方形周溝墓が確認されている。しかし、中期後半には遺構・遺物ともに減少することから、集落は衰退したようである。後期には遺構・遺物はあまり確認できていない。山之内遺跡では、後期後半以降に集落が衰退する一方で、周辺の遺跡では後期の遺構が確認されている。遠里小野遺跡では、円筒形の管状土鍾が出土しており[藤岡謙二郎1942]、長居東2丁目所在遺跡の東方に位置する照ヶ丘矢田遺跡[大阪市教育委員会ほか1999]や矢田部遺跡[大阪市文化財協会1998b]においても同じ頃の遺構が確認されている。

古墳時代中期には、大阪湾を望む上町台地上に前方後円墳の帝塚山古墳が築造される[大阪市文化財協会1998b]。本古墳は現在、大阪市内で墳丘が良好に残存している唯一の古墳で、国指定史跡である。帝塚山古墳の東方にある帝塚山東遺跡では、2004年12月の発掘調査においてこれまで未知見であった帆立貝形の前方後円墳が発見され、「万代古墳」と命名された。この古墳からは、円筒埴輪や形象埴輪をはじめ、須恵器が出土している[松尾信裕2005]。山之内遺跡では、中期になると堅穴住居や掘立柱建物・土塋などの遺構が確認され、この時期に集落が再び営まれるようになる。古墳は確認されていないものの、埴輪片が出土している。このほか遊離資料ではあるが、円筒埴輪片が住吉大社旧境内遺跡[前田豊邦1983]や南住吉遺跡で見つかっている。

古墳時代後期から飛鳥時代では、山之内遺跡や遠里小野遺跡で多数の掘立柱建物群が検出されている。遠里小野遺跡で発見された掘立柱建物は巨大なもので、桁行15.4m、梁行13.8m、面積が212.5㎡あり、建物の周囲には南北76m、東西94mの範囲に柵を巡らせている[大阪市文化財協会1999]。また、南住吉遺跡では、6世紀末から8世紀初めと推定される16棟の掘立柱建物群が確認されている。建物群は5時期にわたって営まれていることから、住吉地域における有力氏族の居住地と推定されている[大阪市文化財協会1998b]。遠里小野遺跡では、鏡状土製品・滑石製品など祭祀に係わる遺物が多量に出土しているほか、勾玉・管玉・白玉などの未製品や加工前の石材・剥片・チップなども数多く見つかっている[大阪市文化財協会1999a]。住吉大社旧境内遺跡から南住吉遺跡北西部にかけての範囲には、6世紀後半から7世紀にかけて掘立柱建物群が形成されている。荘厳浄土寺境内遺跡でも6～7世紀代の遺物が多く採集されている[堀田啓一1979a・b]、[大阪市文化財協会2004a]。また、白鳳期と推定される瓦片がこれまで山之内遺跡・遠里小野遺跡・津守庵寺[藤森栄一1967]で確認されている。

奈良時代になると、南住吉遺跡で井戸が見つかっているものの、全体的に遺構・遺物が僅少となる。山之内遺跡では、掘立柱建物が見つかっている。

平安時代以降では、荘厳浄土寺境内遺跡で鎌倉時代から江戸時代の瓦が多数出土している[楠木久1988][大阪市文化財協会2004a]。また、山之内遺跡では掘立柱建物や溝が確認されているが、遺構・遺物ともに僅少である。しかし、輪羽口や鉄滓など鍛冶関係の遺物やこれらを含む遺構が見つかっている。同様な鍛冶関係遺物は、南住吉遺跡や荊田4丁目所在遺跡においても確認されている[大阪市文化財協会2004c]。

第2節 既往の調査

ここでは、長居東2丁目所在遺跡の変遷や性格を考察する上で重要な南住吉遺跡と、周辺の主な既往の調査について述べる。南住吉遺跡が発見されたのは1959年である。当時、大阪市立我孫子中学校の教諭であった瀬川芳則氏は、土取りや住宅建設の工事の際に南住吉遺跡、遠里小野遺跡、山之内遺跡など計10地点で遺物を採集された[瀬川芳則1959]。南住吉遺跡では住吉第7～10地点がこれにあたる(図4)。住吉第7地点(長居東4丁目)では石鏃と土錘などを、住吉第8地点(南住吉2丁目)では石鏃、須恵器甕・甕、土師器杯・飯蛸壺を、住吉第9地点(南住吉1丁目)では須恵器片を、住吉第10地点(南住吉2丁目)では須恵器片を採集されている。これらの発見と採集資料の公表によって、埋蔵文化財の包蔵地として知られるようになった。

南住吉遺跡における最初の発掘調査は、住吉第8地点内で1980年10月に行われたMN80-1次調査である。以来、財団法人大阪市文化財協会と大阪市教育委員会が連携して調査にあたっており、2003年度までにおよそ740地点で立会調査が行われ、本格的な発掘調査は19地点で実施された。これらの調査総面積は8,637㎡である。

南住吉遺跡の重要性が注目され始めたのは、1985年に飛鳥時代の掘立柱建物群が発見されてからである(MN85-37次調査)。ここでは、6世紀末から8世紀初めと推定される16棟の掘立柱建物が

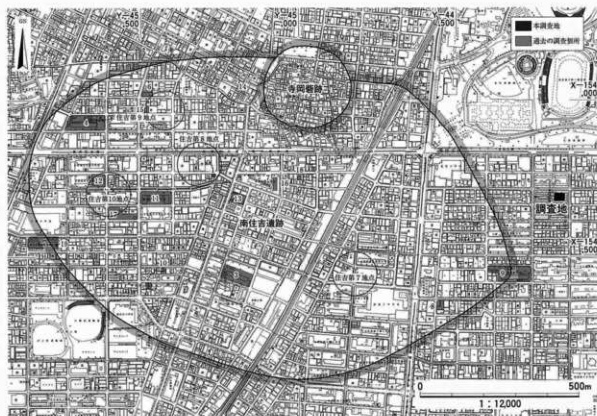


図4 過去の調査地の位置 (大阪市地形図[大阪市総合計画局1984]に加筆)

表1 南住吉遺跡の既往の調査

番号	調査次数	調査箇所	面積(m ²)	おもな遺構・遺物	引用・参考文献
1	80-1次	南住吉2丁目7	27	弥生時代～古代の遺物、近世の遺構、細江川の氾濫原?、段丘構成層中の暗色帯	[大阪市教育委員会ほか1982]
2	82-2次	南住吉3丁目7	40	古墳時代後期の土壌・溝、古墳時代～室町時代の遺物	[大阪市教育委員会ほか1984]
3	85-19次	我孫子西1丁目10	650	細江川支流と考えられる溝、近世の土取り穴群・流路・炉壁	[大阪市文化財協会1998b]
4	85-37次	南住吉1丁目21	1,900	Ma12層(海成粘土層)、縄文以前の暗色帯・石版、飛鳥時代の掘立柱建物・溝・溝群・土壌・落込み、古代の溝、中世の小溝群、近世の井戸・土取り穴・小溝群	[大阪市文化財協会1998b]
5	86-2次	長居東3丁目13	110	近世の遺構・遺物	[横山洋1988]
6	86-40次	南住吉1丁目9	280	古代以前の暗色帯・銅木炭、平安時代後期の火葬墓、室町時代の耕作溝	[京崎寛1988a]
7	86-48次	長居西3丁目2	680	足跡化石状の窪み、縄文時代以前の暗色帯・化石林、弥生時代の石版・石版丁、中世の井戸・溝、近世の流路・井戸・溝	[大阪市文化財協会1998b] [大阪市文化財協会2002b]
8	87-21次	南住吉2丁目9	76	古代の土壌・ピット群、中世の溝	[大阪市文化財協会1998b]
9	88-17次	長居東3丁目20	2,175	古代以前の暗色帯、中近世の遺構・遺物	[京崎寛1988b]
10	89-25次	南住吉3丁目8	103	縄文時代の石版、中世の遺構・遺物(瓦器・管状土器)	[櫻井久之1991]
11	90-25次	南住吉2丁目11	6	地層を確認、時期不明の暗色帯	[木原克司1990]
12	90-29次	南住吉2丁目20	22	弥生時代の割片、中世の遺物	[大阪市文化財協会1998b]
13	93-7次	長居西3丁目5	270	弥生時代の掘立柱建物・土壌・石版・石小刀、近世の井戸	[大阪市文化財協会1998b]
14	94-16次	大領町5丁目12	20	中世の耕作溝	[大庭重信1996]
15	95-1次	南住吉1丁目10	147	中世の火葬墓?・溝、近世の土壌	[大阪市文化財協会1998b]
16	95-20次	長居4丁目3	30	弥生時代前期の遺物、中期の井戸・暗色帯、古墳時代中期の輪式系土器など、後期の遺構・遺物、飛鳥時代の遺構、奈良時代の井戸など	[清水和明1997]
17	99-9次	南住吉2丁目15	343	海成層、古代～中世と推測される土壌	[大阪市文化財協会2002b]
18	01-14次	長居4丁目40	30	中世の溝・柱穴	[大阪市教育委員会ほか2001]
19	02-6次	殿辻1丁目	1,715	古代の掘立柱建物・溝・溝群、細江川支流、旧石器～近世の遺物	[大阪市文化財協会2004b]

確認されている。建物群が廃絶された後も、条里方位に合致する溝が構築されており、銅製の釵具^{かん}が出土している[大阪市文化財協会1998b]。MN86-40次調査では、平安時代後期の火葬墓と考えられる遺構が見つかった。1993年には、弥生時代中期の居住域が初めて確認された(MN93-7次調査)。1995年には、この調査地の東方において弥生時代中期の井戸が見つかった(MN95-20次調査)。この調査地では、畿内第Ⅰ様式新段階の土器が確認された。MN02-6次調査では、これまでの調査で希薄だった旧石器時代から縄文時代の遺物がまとまって出土しており、今後の調査成果が期待される。

また、地層についての貴重な成果も多く、MN80-1次・85-37次・86-48次調査では縄文時代以前の暗色帯、MN95-20次調査では弥生時代中期の暗色帯、MN86-40次・88-17次調査では古代以前の暗色帯がそれぞれ確認されたことから、長原遺跡や山之内遺跡との層序対比が可能になった。このような地層の観察結果から、MN86-48次調査では中期旧石器時代の地層からナウマンゾウと思われる足跡化石状の窪みが見つかった。

第Ⅱ章 NE03-1 次調査

第1節 調査の経緯と経過

当該地において大阪府住宅供給公社東長居団地の建替え工事が計画されたが、大阪市の埋蔵文化財包蔵地である南住吉遺跡と新堀城跡伝承地の間に位置していることから、大阪市教育委員会によって建設工事に先立つ2002年6月26日に試掘調査が実施された。その結果、中世以降と考えられる遺物と遺構が確認され、当協会が本調査を実施することになった。

本調査は2004年4月5日に開始した。住宅建設予定個所に調査区(30m×25m)を設定し、そのうちの650㎡について調査を行った(図5)。試掘調査結果にしたがって、重機によって現代の整地層や攪乱層を除去し、その後人力作業によって遺構の検出や層序の確認に努めた。しかしながら、調査予定面積のうち約180㎡については、1956年に建設された大阪府住宅供給公社東長居団地の基礎工事に

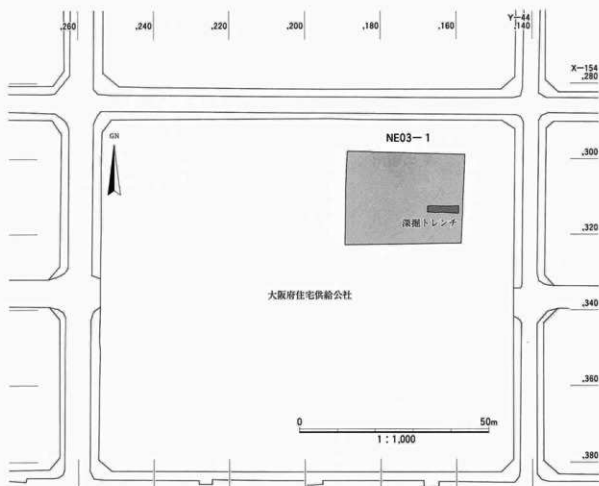


図5 調査区配置図



写真1 作業風景



写真2 現地説明会風景



写真3 深掘トレンチ作業風景

よって壊されていたため、残る範囲を対象に調査を進めた(写真1)。また、12㎡の深掘トレンチを設定して段丘構成層の観察を行った。上記の攪乱層より下位の地層については人力で掘下げ、遺物包含層(第1層)およびその下位層(第2層)の上・下面を精査した結果、多数の粘土採掘坑・杭・井戸・土壌などを確認した。5月24日に近隣住民への現地説明会を開催した(写真2)。これには、長居東地区の方々を中心に53名の見学者が来場した。5月25日に株式会社かんこうによる基準点測量と空中写真測量を実施した。5月26日に地層観察のための深掘トレンチを、調査地東端部に設定して層序の観察を行った(写真3)。5月28日には実測・写真撮影などの現場における発掘調査を終え、5月29日に埋戻しや後かたづけ等のすべての作業を終了した。

第2節 層序

部分的な深掘トレンチ調査を含め、現地表下約2.4m (TP+7.4m)までの地層を観察した(図6、図版3)。その結果に基づいて本調査地の層序表を記した(表2)。以下に深掘トレンチで確認した各層の層相やその特徴を述べる。なお、南住吉遺跡の基本層序[小倉徹也2002]を併記することで層序の対比を行った(表3)。

第0層：大阪府住宅供給公社東長居団地の取壊しの際に形成された現代盛土層および攪乱層で、層厚は0.6～0.7mである。南住吉0層に対比される。

第1層：近世から近代までの遺物を包含する作土層で、層厚は0.1m以下である。暗黄灰色粘土層を主体としており、杭や足跡の埋土となっている。MN1～2層に対比される。

第2a層：灰色粘土層で、いわゆる地山である。植物による攪乱作用によって、下位の第2b層が部

表2 調査地の層序

図面・1層序	岩相	層厚 (cm)	特徴	遺構	遺物	時代	MN基本層序との対比
第0層	黒褐色細～中粒砂	60～70	沖積層 (現代盛土および攪乱層)			現代	MN0層
第1層	暗灰色粘土	4～10	沖積層(作土)	↓踏込み、杭跡 ←松板、粘土板敷、井戸、溝	陶磁器など	近世～現代	MN1～2層
第2a層	灰色粘土	10	低位段丘 構成層	←松板、粘土板敷、井戸、溝		後期旧石器	MN9層
第2b層	浅灰色微細リシルト質粘土	120±		←足跡化石			
第3a層	灰～灰白色細～粗粒砂	30					MN10層
第3b層	オリーブ黄色微細リシルト質極細粒砂	20±					
第4a層	浅黄色シルト	15±					
第4b層	シルトブロック含む灰白色シルト質粘土	10±					
第4c層	褐色シルト質細～中粒砂	25±					
第4d層	シルトブロック含むオリーブ灰色細粒砂質シルト	35±					
第5層	オリーブ黄色細～極細粒砂	10～30					
第6a層	オリーブ黄色粘土～シルト	10±					
第6b層	灰オリーブ色細～中粒砂	20±		←足跡化石			
第7a層	灰色シルト	5～20	中位段丘 構成層			中間旧石器	MN11層以下
第7b層	緑灰色粘土	10					
第7c層	緑灰色細粒砂	10					
第7d層	明黄褐色シルト質粘土	5～10					
第7e層	黄褐色粘土	5					
第7f層	灰黄色極細粒砂質シルト	20					
第7g層	明褐色細～粗粒砂	15					
第7h層	明褐色粘土	10～30					
第8層	緑灰色粘土	30±					
第9層	褐色細～極細粒砂	20±					
第10層	オリーブ褐色極細粒砂	10±					

凡例：←上面検出遺構 ↓下・基底面検出遺構

分的に変質した地層である。

第2b層：浅黄色礫混りシルト質粘土層で、乾痕が顕著である。層厚は約1.2mである。出土遺物はない。下部は細～中粒砂を含み砂質を帯びる。低位段丘構成層の下部に相当し、MN9層に対比される。

第3a層：灰～灰白色細～粗粒砂層である。層厚は0.3mで、出土遺物はない。自然堆積を示す水平ラミナが見られるものの、風化や生物擾乱による土壌化が著しい。基底面で大形動物の足跡化石と思われる窪みが認められた。MN10層に対比される。

第3b層：オリブ黄色礫混りシルト質極細粒砂で、層厚は約0.2mである。東～北壁断面で部分的に認められた地層である。

第4a層：浅黄色シルト層で、層厚は約0.15mである。東壁断面で部分的に認められた地層である。

第4b層：シルトのブロックを含む灰白色シルト質粘土層で、層厚は約0.1mである。深掘トレンチの東端部で部分的に確認した地層である。

第4c層：褐色シルト質細～中粒砂層で、層厚は約0.25mである。正級化構造が認められる。部分的に確認した地層である。

第4d層：シルトのブロックを含むオリブ灰色細粒砂質シルト層で、層厚は0.35m以上である。

第5層：オリブ黄色細～極細粒砂層で、層厚は0.1～0.3mである。ラミナが認められず、生物擾乱などによって地層の堆積が乱されている。

第6a層：オリブ黄色粘土～シルト層で、層厚は約0.1mである。

表3 南住吉遺跡の基本層序[小倉徹也2002]

南住吉基本層序	岩 相	層 厚 (cm)	自然現象 ほか	遺 構	おもな遺物	時 代
沖積層 上部層	MN 0 層	現代盛土および飛込層	—	—	—	現代
	MN 1 層	含細礫黒褐色～黒灰色シルト～シルト質砂	10～15	→井戸・土取り穴群、旧河道	近世陶磁器	近・現代
	MN 2 層	含細礫黄灰～黄褐色粘土質シルト～砂質シルト	10～30	→火葬墓?・井戸	近世陶磁器	近世
	MN 3 層	含礫・砂・礫塊～灰黄褐色粘土質シルト～砂質シルト	10～35	→土壇・ピット群	瓦器・瓦質土器	鎌倉～室町時代
	MN 4 層	暗黄褐色～灰褐色シルト～粘土質シルト	10～20	→堀溝群	—	平安時代
	MN 5 層	暗黄褐色砂質シルト～シルト質砂	5～30	→竪立柱建物群・櫓・柱穴・溝	—	飛鳥～奈良時代 古墳時代 弥生時代後期
	MN 6 層	含細礫黒褐色砂質シルト～シルト質砂～砂	5～40	→竪穴住居・柱穴・土壇	—	弥生時代中期 縄文時代
	MN 7 層	含粗粒砂～細礫黒褐色シルト～シルト質砂	5～30	→竪内第Ⅲ様式・凸基無蓋式石蔵	—	弥生時代中期 縄文時代
沖積層 下部層	MN 8 層	暗黄灰色シルト混り中粒～細粒砂	(不明)	—	(凸基無蓋式石蔵)	—
低位段丘 構成層	MN 9 層	上部：灰～灰黄色粘土質シルト～細粒砂 下部：灰黄～明黄灰色砂礫	30～100	→河川流路、乾痕	—	—
中位段丘 構成層	MN10層	黄白・灰白色シルト～砂質シルト	10～70	→根を置った本株の化石、足跡化石の凹み	—	後期～中期 旧石器
	MN11層	暗灰色・黒灰色砂質シルト～粘土(礫質シルト)(有機質、泥炭質)	5～40	→乾痕	—	—
	MN12層	上部：黄褐色～灰白～褐灰色シルト～砂礫 下部：灰～暗黄灰～暗灰色シルト・粘土～極細粒砂	40～220	→乾痕	—	—
	MN13層	泥炭質暗灰・黒灰色細粒砂～礫質シルト～粘土(泥炭質)	10～35	—	—	—
	MN14層	緑灰～青灰色シルト～砂礫	30～110	—	—	—
	MN15層	暗緑灰・灰色・青灰色シルト～砂礫(海成層(Ma12))	ab.500	→墓穴	—	—

凡例：→上面使出遺構 ↓下面使出遺構

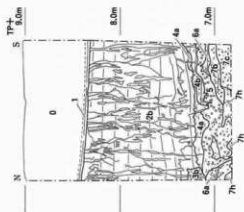
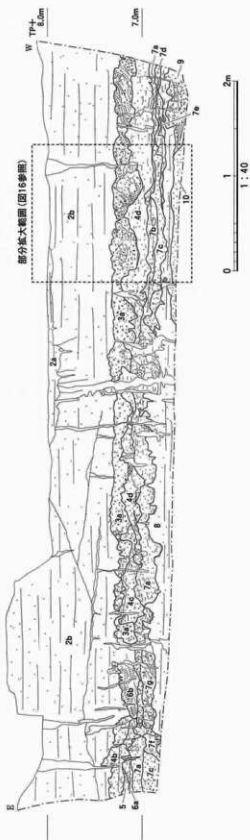


図6 調査地断面図



第6b層：灰オリーブ色細～中粒砂層で、層厚は0.2m以上である。斜交ラミナが観察された。

第7a層：灰色シルト層で、層厚は0.05～0.2mである。平行ラミナが観察されたが、部分的に斜交ラミナも認められた。

第7b層：緑灰色粘土層で、層厚は0.1mである。部分的に黄色粘土が塊状で認められた。

第7c層：緑灰色細粒砂層で、層厚は0.1mである。

第7d層：明黄褐色シルト質粘土層で、層厚は0.05～0.1mである。西端部で部分的に観察された。

第7e層：黄褐色粘土層で、層厚は0.05mである。西端部で部分的に観察された。

第7f層：灰黄色極細粒砂質シルト層で、層厚は0.2mである。東端部で部分的に観察された。

第7g層：明褐色細～粗粒砂層で、層厚は0.15mである。東端部で部分的に認められた地層であるが、斜交ラミナが観察された。

第7h層：明褐色粘土層で、層厚は0.1～0.3mである。東端部で部分的に認められた地層であるが、平行ラミナが観察された。

第8層：緑灰色粘土層で固くしまっている。層厚は0.3m以上である。

第9層：褐色細～極細粒砂層で、層厚は0.2m以上である。

第10層：オリーブ褐色極細粒砂層で、層厚は0.1m以上である。

以上のように、本調査地では近世以降の開発による削平が低位段丘構成層の上部まで及んでいることがわかった。遺構のほとんどはいわゆる地山上(第2層上面)で確認されており、時期区分については出土遺物と遺構の切合い関係から検討を行った。今回南住吉遺跡の基本層序との対比を試みたことで、今後より広範囲に、地層の堆積と遺跡の形成について検討することができよう。また、低位段丘構成層下部から中位段丘構成層上部の境界で大型動物の足跡化石が確認された。これについては、第4節で述べる。

第3節 遺構と遺物

1) 第2層上面検出の遺構と遺物(図7～13・15、図版1・2・4・5)

杭および足跡 調査地南端部で第1層を埋土とする杭および足跡を多数検出した。残存する杭の直径は約0.1m、深さは約0.2mである。これらの杭は、正方位に沿って0.8～1.0m間隔で東西方向に延びており、第二次世界大戦後の土地区画整理に伴う区画内での農地利用にかかわるものと考えられる。足跡はヒトやウシの可能性のあるものが数多くあった。

粘土採掘壕 34基の粘土採掘壕を検出した。これらは、低位段丘構成層上部の上質な粘土層の採掘を目的としたもので、細～中粒砂を埋土とする1群(SK01～06)、シルト質粘土を埋土とする2群(SK10～15)、粘土や細～中粒砂を埋土とする3群(SK20～22)に分類できる。埋土に作土(第1層)を多く含むことから、3群は1・2群より新しい時期に形成されたものと考えられる。出土遺物は、古代から中世の土師器・須恵器・瓦器、近世の陶磁器・土製品・瓦、時期不明の铸造関係遺物、土管である。なお、土管については第Ⅲ章第2節で詳述した。

これらの粘土採掘壕の形状は長辺が2.0～5.0m、短辺が1.0～3.0mの長方形で、深さは0.1～0.3mである。長軸の方位はほぼN70°Eを示しており、一定の区画のなかで規則的に粘土採掘が繰り返されたことが窺われる(図7・15)。明治時代の地図と当時の字区分を合わせてみると、本調査地は「堀村字藤ヶ」にあたり、通常は田畑として利用され、農閑期に粘土の採掘が行われていたと考えられる。正方位からずれた傾きは、この「藤ヶ」の土地区分に照合することがわかった(図18)。しかし、この土地区分は第二次世界大戦後の土地区画整理の過程で解消し、新たな土地区画に基づいて農地としてしばらく利用された後、大阪府住宅供給公社へ引継がれたと考えられる。ここでは、各群の中から主な粘土採掘壕を抽出して記述を行う。

SK01 長辺2.5m以上、短辺2.4m、深さ0.35mの方形の土壌で、北側に同じ形状の土壌が2基掘削されておりこれらと切合っている。土師器・須恵器・丹波産焼締陶器などが出土した。

SK02 長辺2.7m以上、短辺2.5m、深さ0.23mの方形の土壌である。この土壌はSK01との間に空間を設けており、これと切合わないように単独で掘削されている。土師器・須恵器・土師質土器・肥前磁器・関西系施釉陶器・炉壁・铸造関係遺物などが出土した。

SK03 長辺2.5m以上、短辺2.5m、深さ0.25mの方形の土壌で、底が一部浅く掘残されており、掘残しや作業スペースであった可能性がある。また、SK03とSK01やSK02との間には、幅0.5～1.0mの空間を設けており、一定の単位を区切る境界であった可能性がある。土師器・瓦器・肥前陶磁器・炉壁などが出土した。

SK04 長辺1.7m以上、短辺1.4m、深さ0.36mの方形の土壌で、SK01を中心とする土壌群を切っていることから、これらより後に単独で掘削されたものである。土師器・埴焼・鉢・炉壁が出土した。

SK05 長辺2.5m以上、短辺0.8m、深さ0.39mの方形の土壌で、南半部は長円形の土壌によって切られており、近似した時期で形状の違う土壌が掘削されていたことが窺われる。土師器・須恵器・

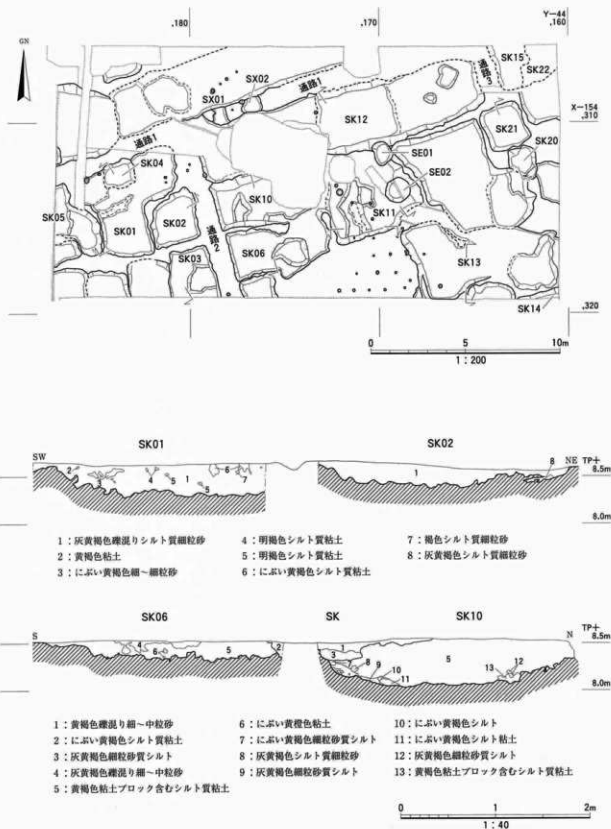


図8 遺構断面図(1)

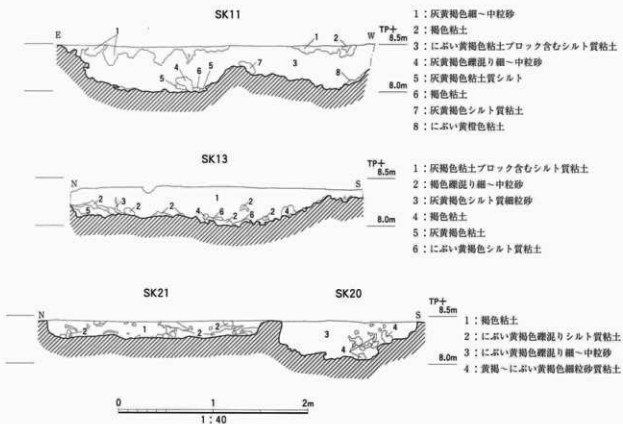


図9 遺構断面図(2)

肥前陶磁器・土鍾状土製品17、瓦・壁土などが出土した。1は肥前陶器碗底部である。17は長さ1.7cm以上、幅0.7cmの極小型の土製品で、直径約0.2cmの穿孔がある。

SK06 長辺約2.5m、短辺2.5m、深さ0.1mの方形の土壌で、東端部分に近似した時期に方位の違う方形の土壌が掘削されていたことが窺われる。また、SK03との間には、幅1.0m程の空間を設けており、一定の単位を区切る境界と作業のための畦道であった可能性がある。土師器・須恵器・中国製白磁碗3・見込に菊花文が施された青花皿5、肥前陶器碗2、肥前陶器砂目皿4、関西系軟質施釉陶器・肥前磁器・布目瓦・土師質甕・铸造関係遺物・炉壁が出土した。この土壌は、肥前陶磁器の年代観から18世紀代の時期が考えられる。

SK10 長辺5.0m以上、短辺2.5m、深さ0.5mの方形の土壌で、底が一部浅く掘残されており、掘残しや作業スペースであった可能性がある。また、SK02との間には幅1.0m程の空間を、SK06との間には幅0.2～0.5m程の空間を設けている。土師器・肥前磁器・関西系施釉陶器・土製玩具18、瓦・铸造関係遺物・炉壁が出土した。18は一分銀を模した形状をしており、表面に分銅文が型押しされている。上端部には直径約0.2cmの穿孔がある。この土壌は、陶磁器の年代観から19世紀代の時期が考えられる。

SK11 長辺5.0m、短辺4.5m以上、深さ0.58mの方形の土壌で、底が一部浅く掘残されており、掘残しや作業スペースであった可能性がある。また、SK06に続く土壌との間に幅0.3～0.5mの空間を設けている。土師器・備前焼締締陶器・瓦・炉壁などが出土した。

SK12 長辺4.3m以上、短辺3.5m、深さ0.55mの方形の土壌で、この土壌の左右には同じ形状の

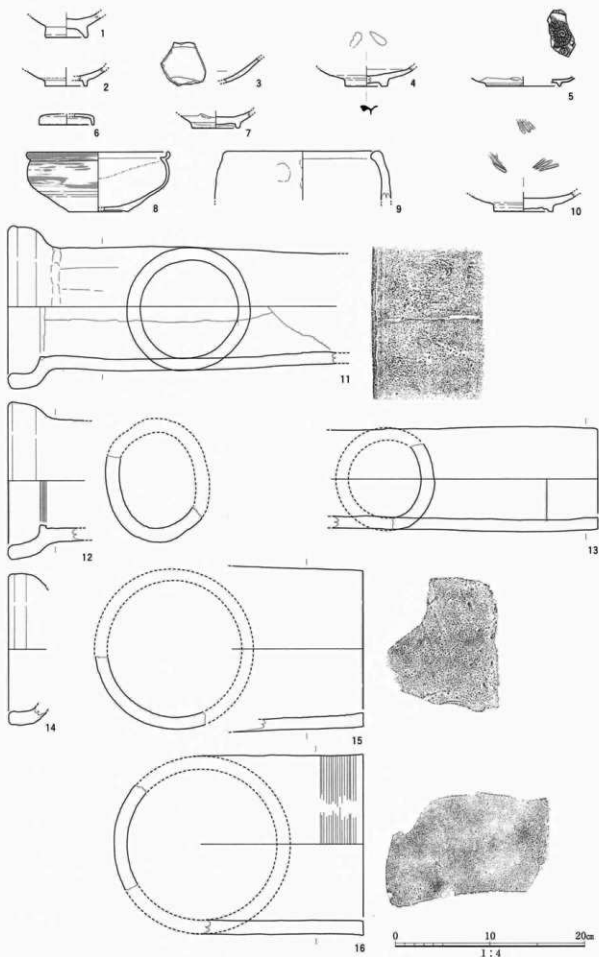


图10 出土遺物(1)



図11 出土遺物(2)

土壌が近似した時期に掘削されている。この土壌列の北側には幅1.2m程の空間を設けていることから、一定の単位を区切る境界や畦道の可能性がある。土師器・須恵器・瓦質土器・肥前磁器・産地不明施釉陶器10、軟質施釉陶器・備前焼締陶器・焼締陶器質の土管11～13・20、土師質土器・鋳造関係遺物・瓦が出土した。11は土管の胴部で、板状の粘土を木型に巻き付けて円筒形にし、ソケット部は外型を用いて型押しした後、ヨコナデ調整したものである。13は土管の端部で、内面に工具痕跡がある。これは、SK15から出土した胴部の破片と接合した。12は土管のソケット部である。産地不明施釉陶器10は、見込に3条の

目跡が3箇所残されており、底部まで灰釉が施されている。

SK13 長辺4.0m、短辺2.5m以上、深さ0.4mの方形の土壌である。この土壌の西側には長辺7.0m、短辺4.0m以上の空地が残されている。土師器・須恵器が出土した。

SK14 長辺2.3m、短辺0.5m以上、深さ0.2m以上の土壌である。調査地の南東隅で部分的に確認した遺構のため形状は不明である。8は19世紀代と考えられる関西系施釉陶器行平鍋で、体部外面の上半部には灰色と灰白色の釉薬が掛け分けられている。

SK15 長辺2.5m、短辺1.8m以上、深さ0.5mの方形の土壌である。上部はSK22によって削平されている。土師器・須恵器・肥前磁器・土管・鋳造関係遺物・炉壁が出土した。このSK15とSK12の間には幅1.0mの空間があるものの、土管13がSK12とSK15から出土した土管の破片が接合したものであることから、これらは近似した時期に埋められたと考えられる。

SK20 一辺が1.5m、深さ約0.4mの正方形の土壌で、土師器・鋳造関係遺物・19世紀代の肥前陶磁器・瓦・石灰に砂礫を混ぜたモルタルが出土した。このことから20世紀代の時期が考えられる。

SK21 長辺2.5m、短辺2.0m、深さ0.2mの方形の土壌で、瓦片が出土した。

SK22 一辺2.0m以上、深さ約0.1mの土壌で、SK15を切っており、上部は削平されている。土師質土器火入れ9が出土した。

その他の遺構 1群の粘土採掘場と同じ時期と考えられる。**通路1**を南北方向に横断し、**通路2**と平行することから、**通路1**が形成される以前のものと考えられる。

SX01 幅0.7m、長さ1.0m以上、深さ0.05mの遺構である。出土遺物はない。

SX02 幅1.1m、長さ0.8m以上、深さ0.04mの遺構で、鉛釉を施した瀬戸美濃焼磁器合子の蓋6と肥前磁器が出土した。

通路 粘土採掘場にとまなう運搬や作業用の通路と考えられる**通路1**～**3**について述べる。

通路1 幅1.0mほどで、西南西から東北東方向へ延びる。通路の左右に2群の粘土採掘場があることから、主にこれらの粘土採掘場で得た粘土を運搬するために掘り残されたものと考えられる。

通路2 幅1.0mほどで、南南東から北北西方向へ延びており、**通路1**と直交している。**通路1**と**通路2**で囲まれた範囲には1群の粘土採掘場がある。

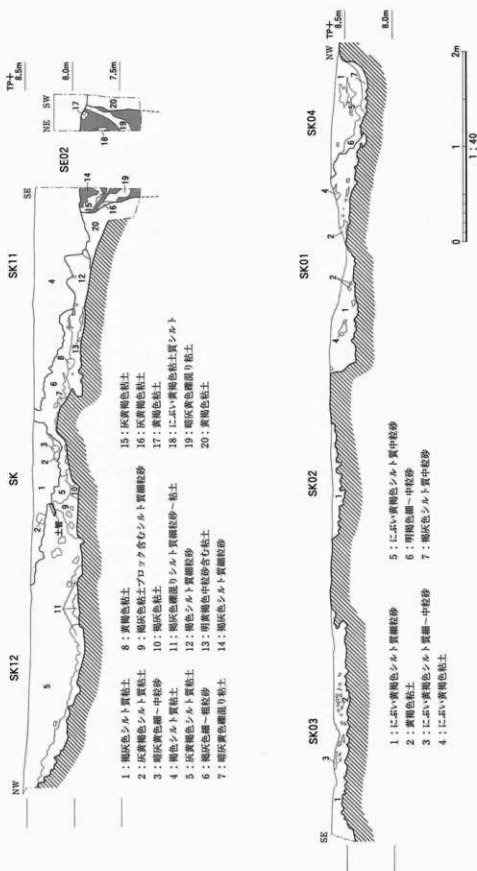


図12 遺構断面図(3)

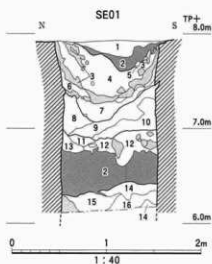


図13 井戸断面図

- 1: にぶい黄褐色シルト質粘土ブロック含む粘土
- 2: 黒色粘土
- 3: 暗灰黄色粘土
- 4: 暗灰黄色礫混り細粒砂質粘土
- 5: オリーブ褐色粗砂
- 6: 黒褐色細～中粒砂
- 7: 黒褐色粘土ブロック礫混り粘土
- 8: 黒褐色中粒砂含むシルト質粘土
- 9: 黒褐色中粒砂～礫混りシルト質粘土
- 10: 灰白色板礫粒砂
- 11: 黒褐色細～中粒砂
- 12: 11層と13層の混在
- 13: 暗灰黄色粘土ブロック含む細～中粒砂
- 14: 黒褐色細～中粒砂
- 15: 褐色シルト質粘土
- 16: 灰白色板礫粒砂

通路3 幅1.0mほどで、上部は削平されていたが南南東から北北西方向へ延びており、**通路1**と直交している。**通路3**の東側と南側には3群の粘土採掘場がある。

井戸 2基の井戸を検出した。これらは、ほぼ同じ規模でかつ並んで掘られており、2群の粘土採掘場が埋め戻される以前に、作土を多く含む埋土で埋められていることから、1群の形成以前から機能し、2群の形成時には埋められたと考えられる。

SE01は直径1.5m、深さ1.5m以上の素掘りの井戸で、埋土は褐色細粒砂質粘土である。鋳造関係遺物と瓦質土器の細片が出土した。

SE02は直径1.4m、深さ1.5m以上の素掘りの井戸で、埋土は黒褐～褐色細粒砂質粘土である。鋳造関係遺物と土師器が出土した。これらの井戸が機能していた期間は出土遺物が少なく特定できないが、埋土には近世以降の作土と考えられる偽礫を含んでいた。

2) その他の遺物(図10・14、図版4・5)

第0～1層掘削中に出土した遺物についてここで述べる。19はサヌカイト製の剥片で、剥離面の風

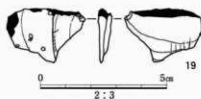


図14 出土遺物(3)

化が進行していることや、剥離の方法から旧石器時代に属するものであろう。厚さが薄く、表面と主要剥離面の剥離方向が90°転移していることや微細な調整加工痕がないことから、石核の調整剥片と考えられる。素材の端部に剥離時の作用にともなうヒンジ・フラクチャーが認められる。打面部は後世の金属工具によって欠損している。7はSK01の周辺部を精査

した際に出土した肥前磁器瓶底部で、18世紀代のものであろう。14は焼締陶器質の土管のソケット部、15は焼締陶器質の土管の胴部、16はマンガン釉が施された土管の胴部である。

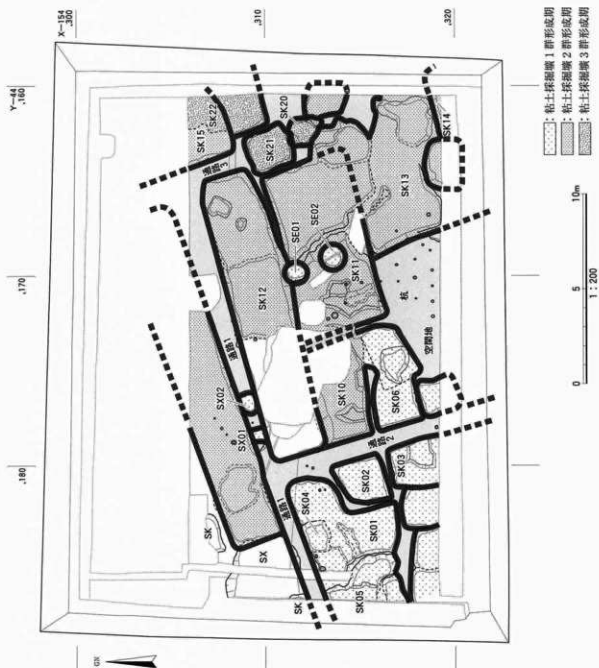


図15 遺構の変遷

第4節 足跡化石の観察

深掘トレンチの断面観察を行った際、第3a層上面において足印^{きくいん}を確認した。確認した深度は、現在の地表から1.7m下位である。第3a層は細～粗粒砂を主体とした水成層で、湿潤な堆積環境であったことを示しているが、下面に凹凸が多いことや、地層の水平方向のラミナ構造が均一でないことから、植物や動物による擾乱作用を強く受けた可能性があった。そこで、これらの地層の乱れを検討することによって足跡化石の検出に努めることになった。今回、深掘トレンチの掘削面積が狭かったことから、平面的に足印^{きくいん}と行跡^{こうせき}の観察を行うことができなかったが、地層の断面観察から、足跡化石として評価できるものを示した(図16、図版3)。足印1は上下2層で構成され、踏込みによる加圧と離脱の結果、下層に粘土質シルトが堆積し、上層に細～粗粒砂が攪拌された状態で堆積したものと考えられる。このことから、第3a層で観察された複数の窪みのうち、足印1は当断面における最大長が0.35mの足跡化石と考えられた。第3a層の堆積した年代は、7～8万年前の中期旧石器時代に相当し、この足跡化石は当時棲息していたナウマンゾウの足跡の可能性が高いと考えられる。今後の課題であるが、第3b～7d層の堆積状況についても部分的な地層の乱れが認められ、特に第7a層に足跡化石が残されている可能性が高いこと、火山灰の検出と検討によって今後年代的根拠がより明確になることが挙げられる。

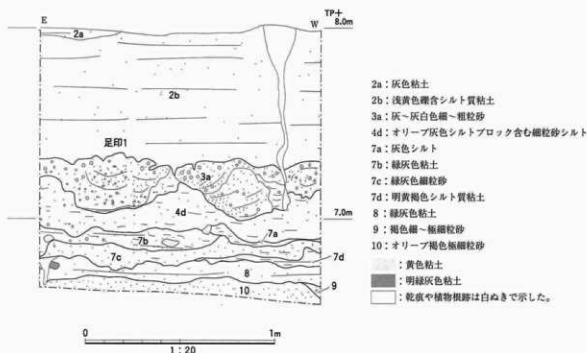


図16 足跡化石地層断面図

第三章 調査成果の検討

第1節 長居東2丁目所在遺跡と堀村・前堀村の歴史

長居東2丁目所在遺跡の発掘調査によって、近世から近代の粘土探掘場が多数見つかったものの、近世以前の遺構と遺物はほとんど確認されなかった。これは、後期旧石器時代の地層である低位段丘構成層が粘土を主体とするため、その粘土を採掘する際に遺物包含層が削平されたことが要因のひとつとして考えられる。このような本遺跡の状況は、近隣の南住吉遺跡や荻田4丁目所在遺跡をはじめとして既往の調査でも確認されている[大阪市文化財協会2004b・c・d]。

ここでは、本調査地が所在する旧堀村の由来と周辺の遺跡との関連性についてまとめておきたい。

堀村の集落は現在長居東1丁目として区分されているが、昭和初期以降の度重なる土地区画整理に伴う整備規制をまねがれており、地図上でも堀村と隣接する前堀村集落の範囲が確認できる(図17・18)(註1)。しかし、本調査地に相当する字「藤ヶ」一帯は土地区画整理にともなう、一区画東西110m、南北45～90mに整然と区画された住宅地や農地へと改変されており、明治20(1887)年の地図上で多数確認される溜池も埋立てられている(図17・18)。

堀村と前堀村集落については、昭和初期まで集落の周囲を堀が巡り、環濠集落の様相を呈していた。伝承される集落の歴史は古く、『天応元年(1288)頃の鑄物師伊岐得久重申状(「兼件卿記」同年七月・八月巻紙背文書)』などによると、「左方兼東大寺灯炉供御人で住吉大明神社修理鑄物師を兼ねる堀郷住人伊岐得久が、「任雅意止鉄屋^{テツヤ}めた」として左近将監助時を藏人所にしきりに訴えている。』[平凡社1986]という記述が見られることから、近代の堀村が鎌倉時代の堀郷と関連性があるとすれば、「堀」という地名の初出は鎌倉時代ということになる。同じく、[平凡社1986]に基づいて堀村に関する記事を列記しておく。

1) 天応元年(1288)頃の鑄物師伊岐得久重申状に、堀郷住人伊岐得久にかかわる記述が残る。

2) 宝徳3年(1451)正月十一日の日付で記された「河内国鑄物師座法」の文中に、「かつた村」「あひこ村」「東堀村」「新在家村」「西堀村」「内かいと村」「にわい村」「大豆塚」の地名が記載されており、これらは現在の住吉区から堺市北部にあった、中世の荘園「五箇荘」の遺称地名と考えられる。したがって、ここに記された「西堀村」と「東堀村」は近代の堀村や前堀村と関連性があるものと考えられる。

3) 「織田軍記」の「信長公南方進発所々御働の事」に、堺付近に新堀^{ニウボリ}という城があり、三好方の軍勢が立籠っていたが、天正3年(1575)四月十九日に織田信長に攻められ落城したことが記されている。

以上の記事に見えるように、中世段階から河内鑄物師関係の史料に堀村にかかわる記事が見られることから、幕府や住吉大社をはじめとする有力寺社と関係のある鑄物師集団が、当該地周辺を拠点として活動していたことが考えられる。本遺跡から南に位置する荻田4丁目所在遺跡では、実際に中世

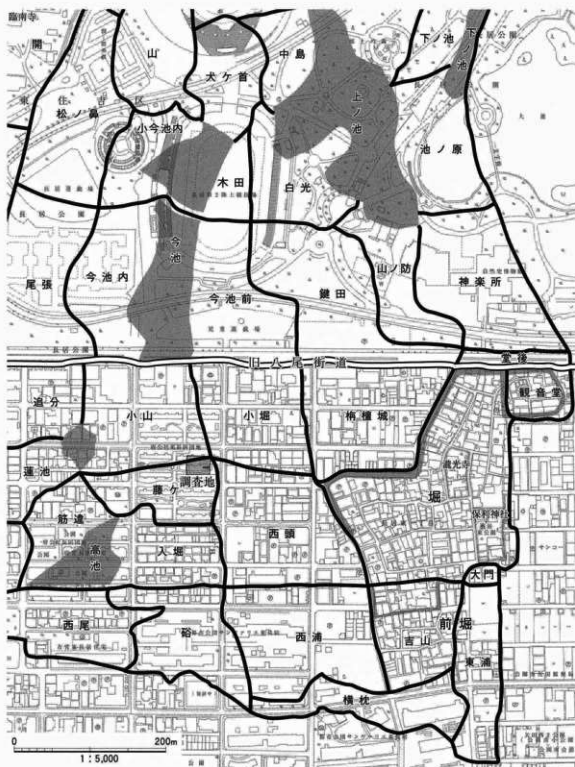


図18 長居東2丁目周辺における学区分復元図〔大阪市総合計画局1984〕を改変した(註2。)

の鋳造関係遺物がまとまって出土したことから「荊田鋳物師」の存在が目されるようになった。本遺跡においても時期の特定ができなかったものの鋳造関係遺物が出土しており、近隣で金属製品の製造や加工が行われたことが推察できることから、堀村における「堀鋳物師」の存在について文献と考古学による検証が待たれる(図版4)。

中世末期にいたっては、堀に囲まれた堀村集落全域が「城」としての機能をもっていた可能性が高く、

字名に「梅檀城」^{うめだんじょう}、「大門」^{だいもん}といった地名が残されていることも「城」との関連性を想起させる。しかし、堀村集落が史料に見える「新堀城」^{しんぼりじょう}であった具体的根拠がないことから、今後も埋立てられた堀や集落内での発掘調査と史料調査による検証作業を行うことが必要である。

江戸時代以降、堀村や前堀村周辺では堺や大坂近郊の農作地として、米・麦・菜種・綿・甘藷・青物(堀だいこんなど)を生産していた。これら農業の副業として、段通・帆木綿・差子織・行灯・位牌・植物油なども生産していたが、特に段通は明治初期より「堺段通」の本場となっていたということである[平凡社1986]。しかし、本遺跡で見つかった粘土採掘堀にかかわる記録はなく、地元長居に居住されている安本雅一氏、松本清氏、前田清右氏の御教示によって、長居周辺では昭和初期から昭和20年代まで作土下層の「粘土」を採掘していたことがわかった。当時は「土取」業があり、馬と荷車を使って住吉大社周辺の窯業所などに粘土を供給していたのではないかとということである。前田清右氏の御教示によると、本遺跡周辺における昭和初期段階の「土取」の記憶はなく、あびこ筋からJR阪和線にかけての宅地造成にともなって採掘されていたということである。したがって、本遺跡の粘土採掘堀の時期は大正時代以前と考えられよう。

以上のことから、本調査地周辺では遅くとも中世段階には金属の製造や加工にかかわって粘土の採掘が始まっていた可能性が考えられる。近世から近代にかけては字を単位として計画的に粘土の採掘が行われていたことがわかったが、採掘された粘土をどこに供給し、何を生産していたかについて史料や考古資料に基づいて検証する必要がある。

註)

- (1) 柴本幸男氏の談話によると、前堀村の範囲は東浦・吉山・西浦・横枕^{よこまくら}・路^{みち}・西尾で集落は吉山にある。堀村の範囲は、この前堀村の北境から北に広がっていたとのことである。
- (2) 図17・18の作成に際しては、[柴本幸男1993]を使用した。なお、大阪市立長居小学校郷土室には柴本幸男氏が作成した500点以上の郷土資料が保管されている。

第2節 粘土採掘場からみる大阪の窯業史

1) 長居東2丁目所在遺跡と周辺遺跡の粘土採掘場について(図19)

本遺跡をはじめとして、南住吉遺跡[大阪市文化財協会2004b]、荻田4丁目所在遺跡[大阪市文化財協会2004c]、難波京朱雀大路跡[大阪市文化財協会2004d]など上町台地上の各所で中世から近代の粘土採掘場が見つかり、これらは、上町台地一帯の粘土を利用してなんらかの生産活動を行ったことを示しており、上町台地が「粘土原産地」として意識されていたことを示唆している。

住吉を謳った和歌に、

馬の歩み押さへ止めよ住吉の岸の黄土
にほいて行かむ (『万葉集』1002)

と見えるように、古代から上町台地の粘土は古人の知るところであり、土器・瓦・窯・土管・煉瓦などに利用されていたことが考えられる。しかし、採掘された粘土がどこでどのように加工・利用されていたかについての検証は難しく大きな課題となっている。

今回の調査地では、地元の方々の口承から、本調査地周辺で掘削された粘土が住吉大社東側一帯で採業されていた複数の窯業所へ運搬され、製品に加工されていたことが推測された。

採掘された粘土は、採掘場として独立した場所から採集されたものではなく、農閑期に農地の作土を一時的に除去して粘土層を出し、粘土を掘削した後、砂質の土を搬入して埋戻し、再び農地の作土で整地するという工程であったことが考えられる。図19にあるように、字を単位として粘土搬出のための通路を確保しながら東から西へ順次掘削が進めら

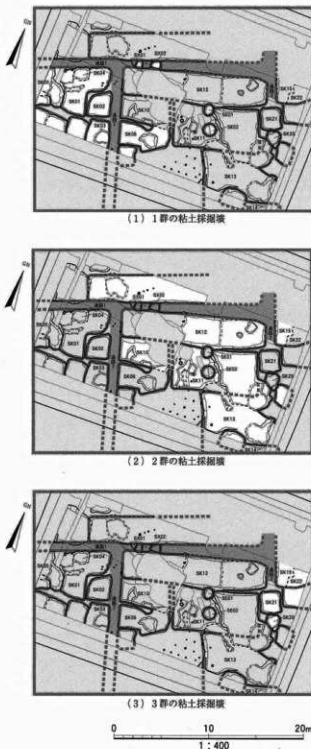


図19 粘土採掘範囲の変遷

れており、掘削単位も小→大→小へと変化する傾向が窺える。

長居東2丁目所在遺跡では、出土遺物や埋土の状態から1～3群への時期的な変遷が考えられる。しかし、掘削の度に搬入土の埋戻しや作土の整地が繰返し行われていたことから、粘土採掘作業は常に計画に基づいて行われたことが考えられる。

2) 丹司家に残された大阪の窯業史

長居東2丁目所在遺跡で確認された粘土採掘場と土管について聞き取り調査を行ったところ、「住吉区上住吉町周辺において昭和30年代まで土管を製造していた窯業所があった。」という地元長居東地区の方々の証言を得ることができた。その証言を元に資料調査を行ったところ、江戸時代享保年間より摂津国大領(現上住吉町)を拠点として瓦を生産していた「丹司家」の存在がわかった。ここでは、丹司得藏氏ならびに、丹司善男氏から御教示いただいた家業に関わる資料などを基にして、住吉町周辺で営まれた窯業の歴史を記しておきたい。

丹司家は、江戸時代には「摂津瓦屋庄兵衛」または「住瓦庄」として、住吉大社宮瓦御用を始め京坂の寺社の御用をつとめていた。瓦の印銘は「御領分摂州住吉 瓦師庄兵衛」であった。大正10(1921)年まで瓦業を営んでいたが、事情により赤煉瓦の製造に事業転換し、「丹司窯業所」を起こした。大正期は赤煉瓦の最盛期で、トンネル・橋脚・鉄道・病院・湾岸倉庫などに大量の需要があった。丹司窯業所では、堺の丹治煉瓦、日本煉瓦、岸和田煉瓦などから煉瓦を仕入れて販売も行った。大正末期から昭和初期には土管の製造を始め、愛知県の日本陶管・森陶管、香川県の谷本土管から土管の仕入れと販売を行った。これらの技術基盤と営業基盤をもとに、昭和9(1934)年以降は衛生陶器の製造販売を行い、現在は大阪府美原町に拠点を移して「アサヒ陶管株式会社」として操業を続けている。

大阪市では明治22(1888)年以降、それまでの下水溝を暗渠にする事業が始まり、土管を埋設する下水道の改良工事を行った。この事業は明治34(1901)年に完了する。明治時代に大阪市域で使用された土管は、堺市のあさの土管や関西窯業の製品が主体であった。

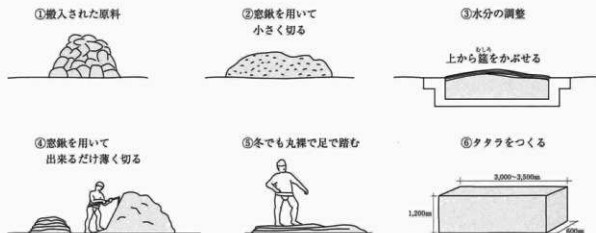


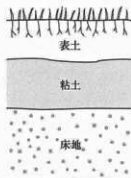
図20 土練りの方法(註1)

大阪市の下水道整備にともなう、一般家庭用の下水施設にも土管が使用されるようになった。そのため、大正期以降住吉区上住吉周辺では、丹司窯業所をはじめとして土管の製造を主とする窯業所が多数操業を始め、大正10(1921)年には大阪市内に土管組合ができた。しかし、昭和30年代以降は塩化ビニール製パイプが普及したことによって市場を奪われ、多くの窯業所が廃業している。当時操業していた主な窯業所は、森延陶業、中野窯業所、浜田窯業所、柴山陶業、清水窯業などであった。

3) 丹司家に伝えられる大正期の土管製造(図20～23)

ここでは、大正期の丹司窯業所における土管製造について丹司得藏・善男両氏から御教示いただいたことを基にまとめておく。

粘土の調達：粘土採掘の専門業者がおり、農家と交渉して上住吉町一帯の窯業所へ納入していた。採掘場所は、JR長居駅東一帯から我孫子方面、堺市の金岡、八下方面と広範囲に及んだ。ここから採掘される粘土は粘性に優れていたが、粒子が細かく収縮が大きかった。これらの粘土は、農耕地の作土より下層の低位段丘層から採取したものである(図21)。粘土を採掘したことで、水田の場合保水性が悪くなるため、一個所で大量に採掘することができず、地価の高騰もあり上記での採掘は次第に困難になってきた。



- ・表土は取除き粘土を採取した後は他より土を選び耕作出来る様にする。
- ・粘土上の方が粘力が強い。
- ・床になると粘力不足と小石が多くなり使用できない。

図21 粘土の堆積状況模式図(註1)

粘土の調整：丹司窯業所へ供給された粘土は、窓鋏(図22)などを用いて精製と成形が行われた。このことについて、丹司得藏氏による図20と説明にしたがってまとめる。

- ①人頭大の土の塊のまま、馬に引かせた荷車で運び込まれ、山積する。
- ②窓鋏を使って小さく切る(刃を熱することで、粘土が切れやすくなる)。
- ③水分を含ませるために、貯蔵施設で釜をかけて保管する。
- ④水分の調整後、窓鋏を使ってできるだけ薄く粘土を切る。
- ⑤薄く切った粘土を、足で踏み充分に練る。
- ⑥瓦の製造工程と同じようにタタラを作る。タタラはその日の土管製造

量に応じて大きさをきめ、空気が入らないように細心の注意を払う。

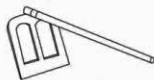


図22 窓鋏(註1)

土管の種類：土管は陶管とも呼ばれ、家庭、農地、下水道の排水用土管を製造した。用途に応じて並管と中厚管があった。並管は一般家庭用で、長さ60cm、直径は6～60cmと多様であった。当初マンガン釉を塗って黒く仕上げていたが、後に食塩釉を用いて茶褐色に仕上げた。中厚管は昭和4(1929)年をピークに、大阪市役所指定業者として市内の下水道埋設用に納入した。この時期の土管は食塩釉を用いた土管で、不足分は愛知県刈谷市の日本陶管や大阪府堺市の関西窯業から仕入れて大量に納入した。厚さは並管の2倍で、長さ60cm、直径は15～45cmと多様であった。納品の際、大阪市の破壊検査や音響検査などの検査基準が厳しかったということである。昭和初期の家庭用土管の直径は12cm



図23 土管の種類

で、下水用の土管は直径15cmのソケット管が一般的であった(図23)。

土管の製造方法：大正10年頃の製造開始期には、土管の本型を常滑の型屋から取寄せ手作業で行った。タタラから針金を使って均等にスライスした粘土板を、かやを巻いた木型(円形の割型)に巻付けて成形し、2～3日乾燥させ、2日かけて焼成した。厚さは直径の1割であった。

4) 近畿地方における近世から近代の土管の特徴について

近畿地方においては、奈良県の社寺を中心に6世紀から17世紀代の多様な土管が出土している。近世以降は主に灌漑用として利用されるようになり、17世紀初頭の兵庫県赤穂水道は土管を使用した事例として有名である。近世から近代における土管の中心的な製作地として、常滑・備前・信楽が挙げられるが、奈良県、枚方市、東大阪市においても地元産と推定される土管の出土例があり、土管の生産地については同定が困難である。ここでは、[柿田富造1992]、[大阪府文化財調査研究センター2002]、[佐伯博光1994]を参考にして近世以降の土管について簡単にまとめておく。

古代から近代にいたる近畿地方における土管の形状の主なもの、(1)筒状土管、(2)玉縁土管、(3)ソケット土管で、これらの出土例の多くは奈良県下にある。

(1)筒状土管は、粘土板や粘土紐を円柱状の木型に巻付けて筒状にしたものである。

(2)玉縁土管は、筒状土管の一端に口径の小さい突帯を設けて接合部としたもので、この接合部を玉縁と呼称している。

(3)ソケット土管は、筒状土管の一端に口径の大きい突帯を設けて接合部としたもので、この接合部をソケットないし、受け部と呼称している。

ソケット土管の初出が、奈良県法隆寺における江戸時代初期(17世紀前半)に比定されることは興味深い。法隆寺では、17世紀後半に比定されるソケット土管も出土している。前者は筒状土管の端部を成形してソケットを作り出しているが、後者はソケット部分を貼付けたもので2つの製作方法があったと考えられる。

焼成方法は、燻瓦製、陶質、須恵質、瓦質、焼締陶器質と多様である。常滑を中心に、明治初期以降防水を目的として灰釉が施され、明治34(1901)年以降には、マンガンを施す土管が製造された。大正11(1922)年以降は食塩釉が主流になる。近畿地方では、近世は瓦質や焼締陶器質が主流であったが、近代以降は日本の近代化政策にともなって、次第に常滑の施釉土管の製作方法が取入れられ、均質化していったようである。つまり、明治時代後半以降にはマンガンを施した土管や、食塩釉を

用いた土管に変わっていったと考えられる。

5) 住友銅吹所跡出土土管と長居東2丁目所在遺跡出土土管について(図24・25、図版5)

大阪市内の主な土管の出土例として、中央区島之内1丁目の住友銅吹所跡出土例が挙げられる。同遺跡出土の土管は、江戸時代後期から明治時代初期の建物や溝に伴うもので、瓦質や焼締陶器質などの土管が多量に出土した。ここでは、明治12(1879)年に完成した住友家西洋館の付帯施設として埋設された土管を含む4点の焼締陶器質のソケット土管を図示した(DB1~4)。これらのソケット部の直径は14.3~17.6cmで、ソケット部の内径は11.6~14.2cmである。胴部の直径は11~13.3cmで、胴部の内径は7.9~10.3cmある。表面とソケット部の内面はていねいなナデで仕上げられ、胴部との接合部分は段差がある。DB1・DB3の胴部内面には、粘土の貼付け痕跡が認められることから、胴部を接合した可能性がある。DB1~4の胴部内面には木型に粘土板を巻付けた際の合わせ目残り、離れ砂が付着している。DB1~2の胴部内面はユビナデによって、離れ砂が部分的に剥離している。DB1~4のソケット部は、胴部の端部を外型を用いて作り出している。表面の色調は明赤褐色を呈しているが、土管どうしの接ぎ合わせの際に、石灰に砂利や砂を混ぜたモルタルを使用した痕跡が残っている。DB3の胴部表面には、墨書で記号が2個所に記されている。

長居東2丁目所在遺跡出土例は7点で、焼締陶器質の土管11~15・20、内外面にマンガン釉を施した陶質の土管16である。11~14・20はソケット土管のソケット部と端部で、外面の色調は暗赤褐色を呈する。これらのソケット部の直径は16~17cmで、ソケット部の内径は12~14cmである。胴部の直径は10~13cmで、胴部の内径は8~10cmある。表面とソケット部の内面はていねいなナデで仕上げられ、胴部との接合部分は段差がある。12の接合部にはハケメが残る。11・12のソケット部は、胴部の端を外型を用いて作り出している。11~13の胴部内面には木型に粘土板を巻付けた際の合わせ目残り、離れ砂が付着している。15は焼締陶器質の土管の端部と思われるが、焼成状態が悪く表面の色調は明赤褐色を呈している。復元される胴部の直径は17cmで、内径は14.5cmである。表面はナデで仕上げられており、端部には刷毛痕跡が認められる。胴部内面には木型に粘土板を巻付けた際の合わせ目残り、離れ砂が付着している。16は内外面にマンガン釉を施した土管の端部で、復元される胴部の直径は19cmで、内径は16cmである。胴部の端部には施釉前に施された描文状の工具痕跡が認められる。これらの土管は11~15・20が農業用に、16が下水用に使われたものであろう。

以上、住友銅吹所跡出土の事例と比較すると、長居東2丁目所在遺跡出土の土管は焼成が堅緻で、内面に付着する離れ砂が大粒であること、成形方法は共通するが胎土や焼成方法が異なることから産地や時期に違いがあると考えられる。ここでは双方とも、江戸時代末期から明治時代初期に属するものとみておきたい。

註)

(1) 丹司得藏氏による原画をトレースさせていただいた。また、説明文も同氏原文に基づいた。

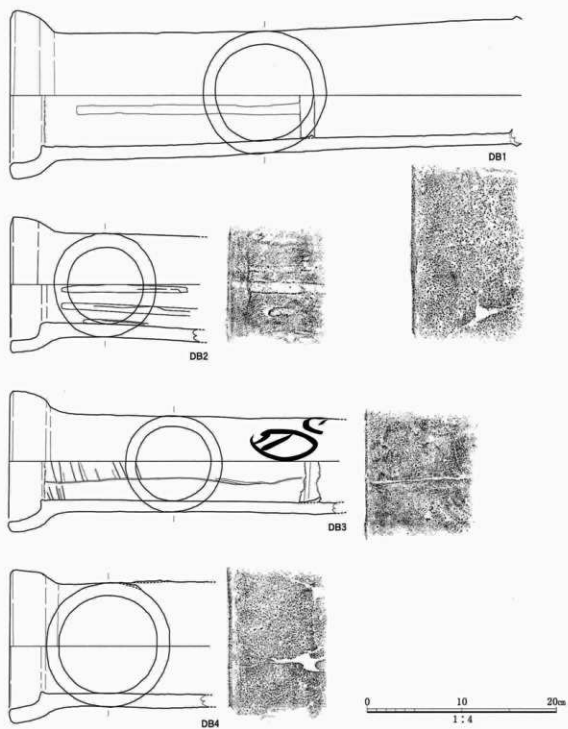


图24 住友銅吹所跡出土土管

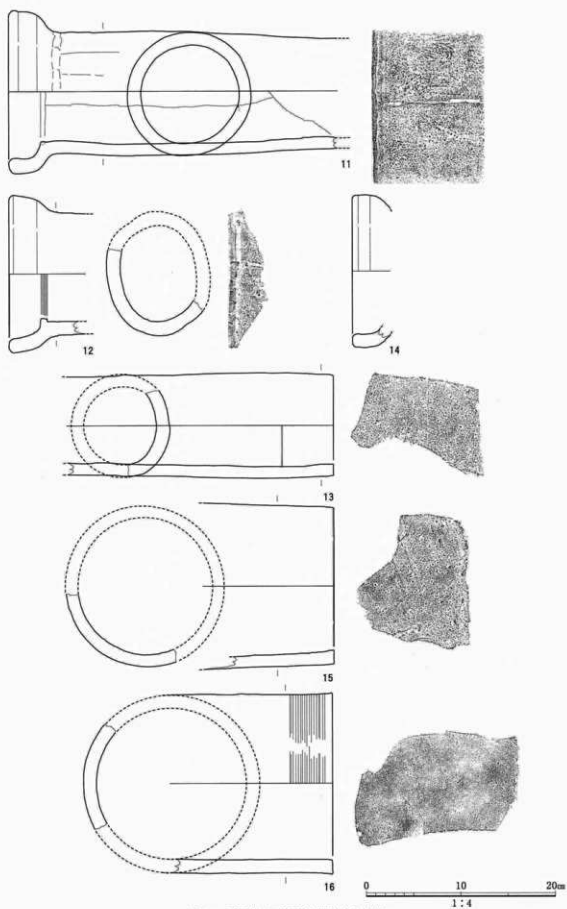


图25 长居東2丁目所在遺跡出土土管

第3節 まとめ

長居東2丁目所在遺跡における調査では、近世から近代にかけて掘削された粘土採掘場を34基検出することができた。この粘土採掘場からは、古代から中世の土師器・須恵器・瓦器、近世の陶磁器・瓦・土製品、近世末～近代初頭の土管、時期不明の鋳造関係遺物などが出土した。また、遊離資料としては、旧石器時代のサヌカイト製剥片や近代の土管がある。全体として遺物の出土量が少なかったことから、粘土採掘場の年代を決定することが難しかったが、地元の方々や、上住吉町で土管を製造されていた方への聞き取り調査から、長居東2丁目周辺における粘土採掘の歴史や、上住吉町における窯業について検討することができた。これらのことから、長居東2丁目所在遺跡では江戸時代末期から明治時代初期にかけて、「土取」を生業とする人々によって粘土が採掘され、遺跡外へ運び出されたことがわかった。この「土取」の歴史は昭和時代まで続いていた。

また、現在の長居東1～2丁目付近はかつて「堀村」や「前堀村」と呼ばれ、鎌倉時代から河内鋳物師の一派が活動していた拠点であった可能性が高く、近隣の畝田4丁目所在遺跡で「火を扱う作業が多い鋳物師が村のややはずれに工房を構えることは極めて妥当性が高い。」「[大阪市文化財協会2004c]と指摘されたように、当該地においてもその可能性は否定できない。

出土した土管については、製作年代や製作地について同定することができなかったものの、近畿地方における土管の歴史が6世紀まで遡り、出土例も少なくないことから大和・河内・摂津の瓦工人集団が製作した可能性が新たに浮かび上がった。製作年代や製作地については今後の資料の蓄積と分析に期待したい。また、江戸時代末期から明治時代初期は、土管製作の拠点が中国地方や近畿地方から常滑を中心とする東海地方へ移り変わる過渡期であり、近畿地方における土管の歴史をさらに詳しく検討していく必要性を感じている。

引用・参考文献

- アサヒ衛陶株式会社2001、『アサヒ衛陶50年史』
- 石井陽子・中条武司2000、『長居地下での地層の全体像－自然史博物館地下の地質4－』：大阪市立自然史博物館編
『Nature Study』46巻5号
- 石神怡1983、『住吉大社境内採集石器について』：『大阪の歴史』第10号 大阪市史編纂所、pp.58－61
- 市原実2001、『続・大阪層群－古瀬戸内湖水系－』：『アーバンクボタ』第39号 株式会社クボタ、pp.2－33
- 植木久1988、『松本邸建替工事に伴う荘厳浄土寺境内遺跡発掘調査(SG86－2)略報』：『昭和55年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.69－72
- 上田宏範1988、『住吉古墳群』：新修大阪市史編纂委員会編『新修 大阪市史』第1巻、pp.374－384
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1982、『南住吉遺跡発掘調査略報(MN80－1)』：『昭和55年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.60－68
- 1984、『南住吉遺跡(MN82－2)発掘調査略報』：『昭和57年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.76－80
- 1985、『沢村邸建設に伴う住吉旧境内遺跡発掘調査(SM83－2)略報』：『昭和58年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.45－52
- 1988、『松田邸建築工事に伴う山之内遺跡発掘調査(YM86－60)略報』：『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.85－87
- 1994、『北村邸建設工事に伴う山之内遺跡発掘調査(YM93－33)略報』：『平成5年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.87－95
- 1999、『城南学園による建設工事に伴う確認調査(TR97－1)』：『平成9年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.69－74
- 2001、『西浦氏による建設工事に伴う南住吉遺跡発掘調査(MN01－14)報告書』：『平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.97－100
- 大阪市総合計画局1984、『大阪市地形図』
- 大阪市文化財協会1992、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- 1995、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ
- 1997、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ
- 1998a、『住友鋼吹所跡発掘調査報告』
- 1998b、『南住吉遺跡発掘調査報告 付矢田部遺跡・帝塚山古墳』
- 1998c、『山之内遺跡発掘調査報告』
- 1999a、『山之内遺跡発掘調査報告 付篇遠里小野遺跡』Ⅱ
- 1999b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ
- 2000、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ
- 2001a、『大阪市文化財協会発掘調査報告－1998年度－』、pp.6－7
- 2001b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ
- 2002a、『大阪市文化財地図』

- 2002b、『南住吉遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 2004a、『莊厳浄土寺境内遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 2004b、『南住吉遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- 2004c、『苅田4丁目所在遺跡発掘調査報告』
- 2004d、『近鉄不動産株式会社による建設工事に伴う難波京朱雀大路跡発掘調査(NS04-1)報告書』
- 大阪府文化財調査研究センター2002、『大阪府枚方市所在津田城遺跡』：大阪府文化財調査研究センター調査報告書第71集
- 大庭重信1996、『小山邸建築に伴う発掘調査(MN94-16)』：『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.119-123
- 小倉徹也2002、『南住吉遺跡の基本層序』：大阪市文化財協会編『南住吉遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.15-20
- 小倉徹也・趙哲清2001、『現大和川流域の低位・中位段丘構成層—大阪市南部の遺跡のデータを中心として—』：『地学団体研究会第55回総会(山形)講演要旨集』地学団体研究会、p.253
- 小倉博之・吉川周作・此松昌彦・木谷幹一・三田村宗樹・石井久夫1992、『大阪府、上町台地南部の台地構成層と地形面の形成時期』：『第四紀研究』第31巻第3号、pp.179-185
- 柿田富造1992、『土管』使用の変遷—古代から明治まで—『常滑市民俗資料館 研究紀要』Ⅴ：常滑市教育委員会
- 1994、『土管』製作技法の変遷—近代常滑を中心として—『常滑市民俗資料館 研究紀要』Ⅵ：常滑市教育委員会
- 木原克司1990、『大阪市都市整備局による市営南住吉第二C B住宅造替に伴う南住吉遺跡試掘調査(MN90-25)略報』
- 京嶋覚1988a、『山本氏による共同住宅建設に伴う南住吉遺跡発掘調査(MN86-40)略報』：『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.77-83
- 1988b、『大阪市営長居住宅建設に伴う南住吉遺跡発掘調査(MN88-17)略報』：大阪市文化財協会
- 久保和士1996、『堀井邸建築に伴う発掘調査(SM94-4)』：『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.127-137
- 建設省国土地理院1965、『土地条件調査報告書(大阪平野)』
- 1983、『土地条件調査報告書(大阪平野)』
- 小山正忠・竹原秀雄1996、『新版 標準土色帖』17版 日本色研事業株式会社
- 佐伯博光1994、『土管考』：『文化財学論集』文化財学論集刊行会、pp.83-92
- 櫻井久之1991、『鉄骨造4階建住宅建設に伴う南住吉遺跡発掘調査(MN89-25)略報』：『平成7年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.149-157
- 参謀本部陸軍部測量局1887、『「京阪地方仮製二万分の一地形図」明治20年測図』
- 柴本幸男1993、『明治初期堀村・前堀村の横古(続) 平成5年10月12日作成』
- 1995、『大阪市立立居小学校創立100周年記念郷土資料目録 平成7年12月15日作成』
- 1997、『大阪市立立居小学校郷土室収納 郷土資料目録(500点作成) 平成9年2月20日作成』
- 清水和明1997、『細井氏による建設工事に伴う発掘調査(MN95-20)略報』：『平成7年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.169-177
- 住吉区役所1953、『住吉区誌』
- 瀬川芳則1959、『住吉区の上代遺跡』：『社会科と教育』研究紀要第1集 大阪市立中学校教育研究会社会部、pp.1-8
- 横山洋1986、『南住吉遺跡で発見された7世紀の建物群について』：大阪市文化財協会編『筆火』2号
- 1988、『田中邸建替工事に伴う南住吉遺跡発掘調査(MN86-2)略報』：『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.74-76

- 高橋工1989、「生田邸建設工事に伴う津守庵寺遺跡発掘調査(TM87-3)」:『昭和62年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.173-187
- 趙哲済1983、「瓜破・瓜破北遺跡の層序」:大阪市文化財協会編『瓜破遺跡』、pp.17-20
- 1995a、「長原遺跡の標準層序」:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.19-34
- 1995b、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」:同上、pp.41-44
- 2000、「瓜破台地東北部の段丘について」:『研究紀要』第4号 大阪市文化財協会、pp.7-16
- 日下雅義1991、『古代景観の復元』:中央公論社
- 平井和2004、「大阪府住宅供給公社による建設工事に伴う長居東2丁目所在遺跡発掘調査(NE03-1)報告書」:大阪市文化財協会
- 藤岡謙二郎1942、「大阪市住吉区遠里小野町弥生式遺跡」:『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告』第12輯 大阪府、pp.67-80
- 藤田和夫・笠間保夫1982、「大阪西南部地域の地質」:『地域地質研究報告(5万分の1図幅)』 地質調査所
- 藤森栄一1967、『かもしかみち以後』 学生社
- 平凡社1986、「住吉区」:『大阪府の地名』I、pp.715-732
- 堀田啓一1979a、「住吉周辺の考古学散歩(一)」:『すみのえ』通巻152 住吉大社社務所、pp.27-35
- 1979b、「住吉周辺の考古学散歩(二)」:『すみのえ』通巻153 住吉大社社務所、pp.19-29
- 前田長三郎1930、「遠里小野石器時代遺跡に就いて」:『考古学雑誌』第20巻9号、p.52
- 前田豊邦1983、「住吉大社と周辺の古墳」:『すみのえ』通巻171 住吉大社社務所、pp.51-59
- 松尾信裕2005、「帆立貝形前方後円墳を発見!」:大阪市文化財協会『葦火』115号
- 宮地良典・田栢庄良昭・吉川敏之・寒川旭1998、「大阪東南部地域の地質」:『地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)』 地質調査所
- 山路茂則1996、「炎と生きるーアサヒ衛陶株式会社前史ー」:『炎と生きる』編纂委員会
- 横田賢次郎・森田勉1978、「太宰府出土の輸入中国陶磁器についてー形式分類と編年を中心としてー」:九州歴史資料館編『研究論集』4、pp.1-26

あ　と　が　き

長居東2丁目所在遺跡は、大阪府住宅供給公社の建設工事に伴って2002年に発見された新指定の遺跡である。ここに、その成果について報告できたことは、隣接する南住吉遺跡や新堀城跡伝承地との地理的、歴史的成果をあわせ、当地域の歴史をより発展的に継承するための契機となろう。

調査の結果、江戸時代から明治時代の粘土採掘場が多数見つかったことから、当時の土地利用が農耕地としてだけでなく、作土の下層に豊潤に堆積した良質な粘土の利用にも及んでいたことがわかった。かつて、長居地区一帯で粘土の採掘が行われていたことについて、地元在住の方々から御教示をいただいたことが端緒となり、江戸時代から住吉大社の瓦御用を司った「丹司家」の存在と、同家に伝わる近世末から近代の窯業史が明らかになり、粘土採掘場と土管について考察を加えることができた。

今後も、地元の方々の歴史を伝え守るすべに御教示や御協力を賜りながら、大阪市の埋もれた歴史を復元できるよう努めていきたい。

(田中清美)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- あ 足跡 …………… 9, 13, 22
- 足跡化石 …………… 3, 6, 10, 12, 22
- 暗色帯 …………… 6
- い 井戸 …………… 4, 6, 8, 20
- か 鉸具 …………… 6
- 火葬墓 …………… 6
- く 杭 …………… 8, 9, 13
- し 滋賀里Ⅲa式土器 …… 3
- 縄文海進 …………… 2
- せ 石炭 …………… 3, 5
- 前方後円墳 …………… 4
- た 竪穴住居 …………… 4
- ち 中位段丘 …………… 12
- 铸造関係遺物 …… 4, 13, 16, 18, 20, 25, 34
- て 低位段丘 …………… 1, 10, 12, 13, 23, 29
- と 土管 …………… 13, 18, 20, 27~31, 34
- 土鍾 …………… 4, 5, 16
- 突帯文土器 …………… 3
- な ナイフ形石器 …… 3
- ナウマンゾウ …… 3, 6, 22
- ね 粘土採掘坑 …… 8, 13, 18, 20, 23, 26~28, 34
- ゆ 有茎尖頭器 …… 3
- よ 窯業 …………… 27, 28, 34

〈地名・遺跡名など〉

- う 上町台地 …………… 1, 2, 4, 27
- お 大阪海岸低地 …… 1
- 遠里小野遺跡 …… 2, 4, 5
- か 海食崖 …………… 2
- 苅田4丁目所在遺跡 …… 2, 4, 23, 27, 34
- 河内低地 …………… 1
- し 磯曲津路 …………… 1
- 莊嚴淨土寺境内遺跡 …… 2, 4
- 新堀城跡伝承地 …… 1, 7
- す 住吉大社旧境内遺跡 …… 3, 4
- た 丹司家 …………… 28, 29
- つ 津守庵寺 …………… 4
- て 帝塚山古墳 …… 4
- 帝塚山東遺跡 …… 4
- 寺岡磐跡 …………… 3
- 照ヶ丘矢田遺跡 …… 4
- な 長原遺跡 …………… 6
- 難波京朱雀大路跡 …… 27
- 難波大道 …………… 1
- 難波宮 …………… 1
- ほ 堀村 …………… 13, 23, 25, 26, 34
- ま 前堀村 …………… 23, 26, 34
- 万代古墳 …………… 4
- み 南住吉遺跡 …… 1~5, 7, 9, 12, 23, 27
- や 矢田部遺跡 …… 4
- 山之内遺跡 …… 2~6

**Archaeological Report
of the
Nagai-Higashi 2-chome Site in Osaka, Japan**

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
The Prefectural Apartmenthouse complex

June 2005

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, in this text

SE : Well

SK : Pit

SX : Other features

CONTENTS

Foreword

Acknowledgement

Explanatory notes

Chapter I Site Location and Outline of Preceding Investigations	1
S.1 Site Location and Outline of Topography	1
S.2 Results of Preceding Investigations	5

Chapter II The NE03-1 Excavation	7
S.1 Background and Progress of Research	7
S.2 Stratigraphy	13
S.3 Features and Artifacts	9
1) Features observed on the top of Bed 2	13
2) Other Artifacts	20
S.4 Observation of the Fossilized Footprint	22

Chapter III Discussion of Excavated Features and Remains	23
S.1 Local History of the Nagai-higashi 2-chome Site and the Hori / Machori Village	23
S.2 Discussion of Clay Mining Pits and the History of Ceramic Production in Osaka	27
1) Clay Mining Pits of the Nagai-higashi 2-chome Site and Neighboring Sites	27
2) The Tanji Family Records of the Ceramic Industry in Osaka	28
3) The Manufacturing Process of Clay Drainpipes Recorded by the Tanji Ceramics Factory	29
4) Special Features of Clay Drainpipes in the Kinki Region in the Pre-modern and Modern Era.	30
5) Clay Drainpipes of the Sumitomo Copper Refinery Site and the Nagai-higashi 2-chome Site	31
S.3 Conclusion	34

References	35
------------------	----

Postscript

Index

English Contents and Summary

Reference Card

ENGLISH SUMMARY

Introduction

This excavation report is the first volume on the Nagai-higashi 2-chome site which was excavated in 2004, covering 650 square meters. The site is located in the Sumiyoshi ward, southwestern part of Osaka city, has archaeological remains that date from the Palaeolithic period up to the Modern era. Geographically, the site is situated at the lower part of Uemachi upland, eastern side of its slope at the height of approximately TP+8m.

Two important ancient roads are supposed to had been situated near the site. One is *Shihazu-michi* (Nagai-koen dori at present) at the northern side, another is *Naniwa-daido* at the eastern side. On this condition, the area including the site developed as important point from ancient time onward. As archaeological site the Minami-sumiyoshi site and the Shimbori medieval castle of legend are located in surrounding area.

Investigation results

This excavation at Nagai-higashi 2-chome site revealed the Pre-modern features and artifacts, although the soil layer prior to the Pre-modern period had been destroyed with the disturbance during the Pre-modern and Modern period, except some artifacts of the Upper palaeolithic up to the Medieval period.

The most noteworthy excavated features are 34 clay mining pits of the Pre-modern period. From its characters, with the stratigraphical situation that the excavated soil was limited to the Upper palaeolithic layer; the lower layer of the Uemachi upland consists of mainly clay, the pits are considered to be formed due to the clay mining. In addition to this, we also found a number of features and artifacts of Modern period. Moreover, the research on the local tradition and historical materials relating ceramic production was conducted. The excavation results, with the information from the local tradition, suggests that the clay mining was carried out extensively around the area, and obtained clay was utilized as the material for metal casting and production of earthenware, tile and clay drainpipe.

These ruined clay mines are characteristic of the site, they were also found at another site on Uemachi upland, such as the Minami-sumiyoshi and the Karita 4-chome site. Further research on clay manufacturing and utilization will be expected.

In addition to these, the fossilized footprint of a large animal, Naumann elephant, was found in a layer dating to the Middle palaeolithic period.

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながいひがし2ちょうめしよざいいせきはくつちようさほうこく							
書 名	長居東2丁目所在遺跡発掘調査報告							
編 著 者 名	平井和・田中清美							
編 集 機 関	財団法人 大阪市文化財協会							
所 在 地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL 06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2005年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道路番号					
ながいひがし 長居東 2ちょうめ 2丁目 しよざいいせきはく 所在遺跡	ながいひがし 大阪市住吉区 ながいひがし2ちょうめ7 長居東2丁目7	27120	—	34° 36′ 30″	135° 31′ 00″	20040401 ～ 20040529	650㎡	大阪府住宅供給 会社による住宅 建設工事に伴う 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		
長居東2丁目 所在遺跡	粘土原産地	旧石器時代 ～近代		粘土探掘壕・杭跡 井戸・足跡化石		剥片・土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器・瓦・ 陶磁器・土管・鋳造関係遺物		

圖 版

調査地遠景
(西から)



杭列検出状況
(西から)



SE01・02完掘状況
(西から)





SK01~SK04
(南から)



SK13
(西から)



SK21
(西から)

深掘トレンチ
(北東から)

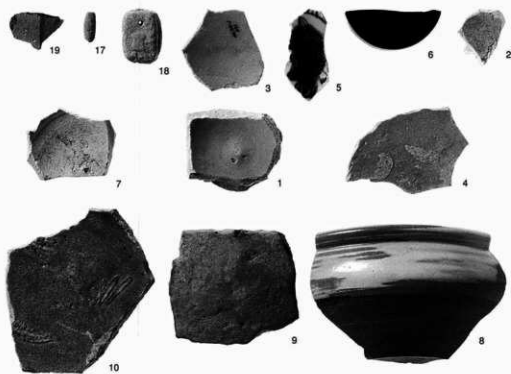


第3a層堆積状況
(北から)



足跡化石
(北から)





SK05(17)、SK06(2～5)、SK10(18)、SK12(10)、SK14(8)、SX02(6)、
遊離資料(7・19)



粘土採掘溝出土の鑄造関係遺物



上段左：土管正面、上段右：土管側面、下段左：土管側面、下段右：土管後面
SK12(11)、SK12+SK15(13)



出土土管：SK12(11 · 12 · 20)、SK12+SK15(13)、遊離資料(14~16)

大阪市住吉区 長居東2丁目所在遺跡発掘調査報告

ISBN 4-900687-89-8

2005年6月30日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法門坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 アインズ株式会社 大阪営業所

〒540-0041 大阪市中央区北浜2-1-14

**Archaeological Report
of the
Nagai-Higashi 2-chome Site in Osaka, Japan**

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
The Prefectural Apartmenthouse complex

June 2005

Osaka City Cultural Properties Association